

女の一人

學校から歸つて、自分の家に程近い大通りの四つ角のところで二三人の友達と遊んでゐると、

「もしもし」と不意に此邊では聞馴れぬ女の聲に呼び掛けられました。

ポストの臺石の上に乗つて背競^{せくら}べをしてゐた私は、吃驚して其屋根につかまつたまゝ振り返ると、異様な扮装^{いでたち}をした一人の女が——異様といつてもよくよく見れば特別に可笑^{みなり}しな服装ではないけれど、全く見馴れぬ姿と顔とが咄嗟^{とっさ}にさういふ感じを抱かせたのです——女は年の頃十九か二十位で、頬冠りにしてゐた手拭ひを顎のあたりで解きながら、低く私達の前に小腰をかぐめ、

「小林甚五郎様つていふ親方のお家はどちらでせうか。」

其言葉は正しく其身なり同様此近在の者ではありませんでした。女は此寒空に——三月とはいへ北國の氣候は全然まだ申分のない冬で、此細長い町を挟んで西にも東にも山脈は雪の襷^{ひだ}を疊んでゐます——へっそりした拾一枚、赤ちやけた黒紬の半纏も拾らしく、痩せとがった肩先にぴったり附着して居るのです。胸の痛みでも庇ふやうに少しこゝみ加減にはなつてゐるが、背は高い方で、其薄着の裾を端折つて冷たさうに草鞋を履いてゐました。

「小林甚五郎様つていふんですが——」と私達が呆氣に取られて黙つて居ると、女は再び繰り返しました。

併し私達は知りませんでした。姓と名とをいふ代りに、何屋といふ屋號を用ゐてくれたなら、町っ子の私達は大抵の家と人を知つて居たでせう。私達が町の人の姓名を問われて解かるは、自分の學校友達の範圍内だけです。

「知らね！」

「おらも知らね。」と私達は言ひました。

女は失望したやうにびちやびちやと草鞋を踏んで私達を離れました。股引から半纏の裾から、泥はねがいっぱいこびりついてゐました。其後姿を、私達は何かかう不思議なものでも見送るやうに見送りました。

さて茲は此町の中心點で、村から村、町から町へと通ずる本通りの中央であり、四つ角を作つて横に通ずる道路の末々には、幾つもの村々が連なつてゐて、村人は皆此町をさして日用品の買入れにやつて來るのです。女は多分何處からか縣道を一直線に進んで來て、

町外れから町へ町へと流れるやうに入り込み、この他國の漂泊人にも目につく町の中心に來て足を止めたのでせう。

私達を離れた女は、お茶屋の前にどっこいの店を出してゐた横鬢の禿げた男の前に行つて又小腰を跼めました。常に見馴れた顔と見知った顔と、若しくは同じ型の顔と姿とにばかり馴れてゐた私の瞳には、この瘦せた寒さうな女の姿が一際特別に焼きつけられました。私は一目散に家の中に駆け込み、そして母親に今見た事の一部始終をさも大事件のやうに話しました。

「小林甚五郎つていふのは、そらあの十一味唐辛の親爺のこつた。」と母が申しました。

「あの親爺はあれで此邊の香具師の親方なんだ。」と。

其頃毎朝朝早く十一味唐辛と七味唐辛を賣つて歩く男女がありました。十一味の方は大きな體格の中老で、七味の方は其女房でした。それを私は大抵「唐辛のおやぢ、唐辛のおつかあ」と呼んでゐました。

して又其時分の私の家は半農の生活で、四軒間口の店を有しながら、其店を開く者がまだ見習ひ奉公中だったので、老いた父母と姉と私の小娘二人の四人がガランとした家に起き臥し、店は常に蔀が下してありました。それが軒並み何らかの店を開いてゐる此邊にただ一つの淋しい邪魔をしました。

其閉ぢた店先を借りていろんなものが商賣をしました。時には臺の油を賣る松井源水が抜き放った刃の先で獨樂を廻したり、或時は瀬戸物の競賣商人が來て黒山のやうに人を寄せました。そして不思議な女のやつて來た日の二三日前からは、丁度その唐辛賣りの親爺が私の家の店先を借りて、女房と十二三の息子に店番をさせて一錢八厘店を開いてゐました。

「どれでも買ひなよ一錢と八厘……」と言つて客を呼ぶので、つまり一錢八厘の均一店なのです。金の玉と鳥の羽を取合して、それに針金の脚のついた簪だの、金箔と水が玉の中に動いてゐるギヤマンの簪、玩具の小さなラッパだの鎖のついた粗末な臺口、毛糸の羽織りの紐や何か、在所者の低い趣味と生活程度に應ずるやうにピカピカと飾たてゝありました。

丁度それを見廻りに來た唐辛の親爺が、むっくりした筒袖の綿入れに懷手して往來を眺めてゐると、先刻の女が誰かに教へられたとみえて私の家の前にやつて來ました。そして親爺の前に丁寧に腰をかゝめて——頬冠りを外して手拭ひは首の廻りに緩く結ばれてゐた。髪は根の低い銀杏返しのひとつく壊れたものでした——袂から皺くちやになつた手紙

やうのものを渡して又丁寧にお叩頭じぎをしました。

かういふ者に對する親爺の大風な態度を私は吃驚して見てゐました。間もなく親爺は女房に何か二言三言いひ置いて、この見窄みすぼしい女を連れて何處へか行きました。女の瘦せた肘が割合に長い袂の振りから寒さうにのぞいて居ました。

道が解けてゐたらそれは北國ほくこくの冬がだんだん春に近づいた證據で、あつさりと降つた雪を解かすだけに氣温が甦りつゝあるのです。御覽なさい、空も何となくどんよりとした特有の曇りを失ひつゝあるではありませんか。そして此頃が最も大道店の盛んになる時で、辻の角々やしもたやの格子戸の前などに、瀬戸繼ぎの藥賣りが地べたに筵むしろを敷いて口上を言ひ言ひ瀬戸の破片かけらを繼ぎ合せて見せてゐるかと思ふと、弘法様の石芋といふ有難い石を削つて緒病の妙藥だと律儀な田舎者に頂かせてゐるお爺さんがある。これらはすべて渡り者で、一つ所に長くて四五日しか姿を見せないのである。

さて其翌日學校から歸つて又例の通り表に遊びに出て見ると、昨日のあの女が平氣な顔でどっこいの店の前に腰掛けて居るのを見ました。私は不思議なものを見つけたやうに、遠卷きに其店の前に立つて女の顔を眺め初めました。

「姉ちゃん一つ如何いか？」と女は誘ふやうに私に呼びかけました。自分が昨日物を問うた子供だと思ひ出しも、思ひ出さうともしないやうな調子でした。

「さあいらっしゃい！ 僅か一錢のお慰み！ 一錢でお好きなものが取れるお慰み！」と、一寸でも足を止めかける客があると、女は其眇目のやうな眼をふりあげて呼び掛けました。どっこいといふのは文廻ぶんまはしの賭け事で其文廻ぶんまはしの周圍には蜜柑の山や下駄などが並べてあり、さて客が如何程狙どひをつけて廻しても、中々思ふ所には止まらず、五厘の値打ちもないやうな品の前にばかり止まりたがるのでした。私は毎日のやうにそれを見ても、下駄や蜜柑の山やが取り替へられたのを見た事がないので、よく足の先に綱がつけてあるのなどと臺の下を曲つて見たりしたものでした。

「オット、どっこいどっこい、そらそら當るぞ當るぞ、あゝッ、あぶない加減だ、オット、どっこいしょ！」などゝ、ぐるぐる廻る文廻ぶんまはしを筋面白くつけて女は嘸はやしたてました。

愚かな田舎者は、今度こそ今度こそと眞顔な努力を見せて、やがて何の得るものもなく漸く其處を離れ去るのでした。

「さあ いらっしゃい いらっしゃい、僅か一錢のお慰み！」と女は投げ出された二三錢を掻き集めて又新なる客を呼び初めました。

其翌日も亦其翌日も、女は依然として角にどっこいの店を出して居ました。そして或日

私が學校の歸りに其前を通りかゝると、隙さうに生欠伸を噛みしめてゐた女が、心持ち笑みを泛べて見知り越しの者を迎へるやうな顔をしました。

「おいおい姉ちゃん姉ちゃん、艶文がおつこちたよ！」

不意にかういふ聲がしたので振り向くと、女は私の袂から落ちた鼻紙を顎でさし示してあはあはと笑つて居ました。私はそれが何の事かよく解らなかつたけれど、變な氣がして――まだ露ほど混りつ氣のない少女の心こどもに、女の一人が經て來たさまざまな過去がちらりと影さしたのです――急いで家に駆け込むと、母に其事を言ひつけて置いて、いつもの小遣ひをねだらうともせず、に又表に飛び出し、家の前に立つて遠くから其女を凝眸と眺めるのでした。

それから間もなく、いつの日からか女の姿は此町から消えて居ました。
そして永久に。――

底本…「水野仙子全集」第四卷

初出…「讀賣新聞」大正五年四月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年八月十日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)